

釣り

東北の江島えのしま (その一)

十年ひと昔という言葉が現在でも生きているとすれば、これは昔むかしその昔ということになる。女川湾は牡鹿半島おしかの北に隠れるようにあり、西側に切れ込んだ良港である。広い入り江といっても良いこの湾は、三方を小高い山々を楯として、波は真東まひがしの風以外穏やかである。しかし、何といっても釣り人にとって、この湾の魅力はアイナメである。東北の海にも「江ノ島」はある。その「江島」は女川湾の東、やわらく霞んだ外海の空と親潮の海の間に浮かんでいる。

私がこの海に通い出してから四十年ほどになるだろう。きっかけは偶然開いた釣り雑誌で、女川湾はアイナメの宝庫という記事を目にしたからである。特に、外洋にポツンと浮かぶ江島えのしまの周辺は、子どもでも釣れる手つかずの好漁場で、五十尾は堅いと書かれていた。私はアイナメという魚を釣ったこともなければ、見たこともない。記事には写真も載せてあり、正直のところ、姿の良くない魚という印象を受けた。私の魚に対しての概念は、淡水では鯉、鮒の形であり、岩魚の姿さえ魚の典型から外れていた。海では烏賊いかや蛸たこは例外

としても鯛たいとか鯉かつおや鮪まぐろが魚の形であり、姿のよいものほど味もよいものと思っていた。山育ちの世間知らずには、海は数回見たり泳いだりしたことはあるものの、釣りについては未体験ゾーンだったのだ。

昭和四十八年の夏休み、私の話に食いついてきた旅好きの同僚が江島行きを計画した。五名の教員は全く海釣りの経験がなく、一度だけ岸壁釣りの経験をもつ私が案内人なのだから、心もとないといえどこれ以上の危うさはない。六名は地理の副教材で使う地図を頼りに、「道に行き止まりはない」などとはしゃぎながら、海岸線に寄り添うように北上した。この頃は東北自動車道も三陸自動車道もなく、案内板も十分ではなかった。案の定、迷いに迷って女川の船着場には、郡山から五時間以上もかかってしまった。棧橋に着いてみると、当時一日二便の連絡船は、遙か一時間も前に出航した後であった。弾んでいた心はしぼみ、我々は閑散とした船着場に途方に暮れ、ボンヤリと遠く霞んで見える江島を眺めていた。すると、一艘の漁船が近づいて来て、「どこさ行くんかしんねえが、昼前の船は終わりだぞ」という。訳を話すと、「おれも江島に帰えるところだ、乗ってっか？」という。渡りに舟は、諺を現実として展開して見せた。

しかし、幸運や不思議は連続しない。中年の漁師は、「時々、保安庁の船が巡回して来るっちゃ、機関室にもぐり込んで絶対に姿を出さねえでくれや」と云う。客船以外に乗客を乗せてはならないことは、厳格に守られているらしい。ここではこれに従うしかない。操舵室には、操舵の漁師を含めて四人は入れるように思われたが、これも違反になるらしく、結局六人は釣具を甲板に置いて狭い機関室に押し込められた。

機関室は狭い上にエンジンの騒音がひどく、窓のない部屋は、油の匂いが鼻を突き、穏やかに見えた海も、船が走り出すと前後左右に揺れ、波を切る音が機関音を倍加させて、さながら地獄もかくありなんと思わせた。機関室の中では誰もが押し黙って目的地へ着くのを待つというよりは、この漁船に乗ったことを後悔していた。

目隠しの小一時間は長い船旅だった。船はどうやら目的地に着いたらしい。六人は船酔い状態で、青い顔で足元をふらつかせ江島に上陸したものの、みなへなへなど、岸壁に座り込んでしまった。漁師は我々を気遣う様子もなく、「宿はどこでござん？」と聞く。「鶴富つるとみです」と応えると、「うちの隣だな」という。後でわかったことだが、

この島に民宿は二軒しかなく、鶴富は今年開業したばかりのものだ

という。この「鶴富」は女川町の観光課に電話で問い合わせ、紹介された宿である。

我々が立つ様子も見せないでいると、漁師は手早く船を繋ぎ止め、「車で迎えに来させっからや、ここで待ってでくらん」と我々を置いて丘の方に歩いて行く。漁師の後ろ姿を追うと、岩石を積んだ階段の小路こみちをスタスタと登って行くのが見える。それにしても、この島は遠景からは想像も出来ない荒々しい姿でいま目の前にある。海から二ヨツキリ頭をだしたような形で、急な斜面に岩を積み上げ、おそろしげな地形に家々が建っている。これも後でわかったことであるが、人口は約四百人弱で小中学校の分校もあった。電気、水道、電話は最近整ったインフラで、島は湧き返ったという。それで民宿も出来たのであろう。

迎への車は自動車を予想していたが、車とは古い耕運機のことであつた。三十歳ぐらいのたくま逞からだしい身体の人が運転して、蛇のように曲がりくねった坂道を下りてきた。頭を一つ下げた彼はいきなり「乗るか、登るか」と云う。意味がわからずに我々が顔を見合わせていると、「魚はこれからの潮がよがんすよ」と云ったので意味がとれた。

時刻は午後二時過ぎ、どのみち宿へいってもこれといってすること

もなし、第一、我々は釣りに来たのだ。迷わず「乗る」を選んだ。

彼の船は木造船であったが、全員乗ることはできた。

ここで私と船頭の間で、忘れられない会話が交わされた。私とほぼ同年代と思われる船頭は、私が持っていたクーラーボックスを指差して「これは何だ」と聞いた。私は買ったばかりのボックスについて、「これは釣った魚の鮮度を落とさないためのもので、釣り人にはなくてはならない便利なものだ」と説明をした。すると彼は笑いもせず、「少し待ってでけらい」と言い残し、船から上がると共同で使っているらしい近くの物置小屋から、私の腰の高さほどもある蓋付きのポリバケツを持って来て積み込んだ。私は万一の救命具かな、などと見ていた。この船頭は口数が少ないというか、単語か短い語句しか使わないのだ。複雑な会話は互いの顔の表情で交信するしかない。船が岸壁から二百メートルぐらい離れたところで「いがんす」と船頭が声を掛けた。予め全員に講習はしてはしておいたものの、釣り場の余りの近さに皆は少々慌て気味である。

釣り場は江島本島と、ウサギを放し飼いにしているという小さな無人島の間で、波は比較的穏やかであったが、潮の流れは速いらしい。船頭はエンジンをかけたまま、絶えず船をコントロールしてい

た。間もなくそれぞれに、それなりに仕掛けを落とし釣りの形を作った。すると一人がすぐに大声で「掛かった、掛かった」と大騒ぎの中で、二十センチほどの魚を船内に取り込んだ。みんなは、その魚を覗き見て「変な魚だなあ」とか、「斑模様まだらが気味悪い。」などと釣り上げた驚きや羨望せんぼうとは違った反応を示した。

船頭は船内のひと騒ぎが収まった時、「ネウだ」と云った。私はここで黙っていればよいものを「江島はアイナメが釣れると聞いてきたんだがなあ、ネウか」と言ってしまった。すると、船頭はぶつきらぼうに、「ネウはアイナメだ。」といった。船内は途端にシュンとなくなってしまった。

しかし、アイナメいやネウは大いに釣れた。錘おもりが海底に落ちた瞬間コツコツという当たりでリールを巻くと、裏切られることなく竿全体に快い抵抗感を加えながら、ネウが水面に上がってくる。エラココ（袋イソメ）を剥むくのが間に合わないほどの入れ食いだった。私の小ぶりのクーラーボックスはすぐに一杯になり、クーラーを持参していない他の人たちは、釣り上げた魚を特大のポリバケツにいれるしかなかった。この時になって、船頭が私のクーラーボックスをみて「これは何だ」と聞いた理由が解かったのだった。船頭を馬鹿

にしたわけではなかったのだが、私が海釣りを知らなかったのと、初めて手にしたクーラーに有頂天になっていたのだ。船頭には失礼なことを言ってしまったと深く後悔した。しかし、海育ちで鷹揚おつようなこと言ってしまったと深く後悔した。しかし、海育ちで鷹揚なこの船頭はこの些事さじを意に介する風もなく、以後親交が深まるにつれて親友のような付き合いになった。二時間ほどで持参した餌を使いまわし、この日の釣りは終了した。

大バケツの中の魚は、大小百尾は下らなかつたであろう。魚種は鱒かれいが数枚の他は全てアイナメである。「今日のネウはちゃっけなあ」と船頭は云ったが、三十センチを悠に超えるものも入っていて、我々には予想を超える豊漁だった。「明日の朝は沖き出るで、楽しみにしてけらい」と申し訳なきように云う。私は明日の魚より今日のこの魚をどう処理するのか心配だった。

民宿までは耕運機に荷物だけを載せ、我々はその後を、島のメイーンストリートになっている、二メートルほどの急な坂道を歩いて登った。目的の宿は島の上の方にあり、機関室の初体験とあいまって疲労の極に達した。宿の家族は主あるじの老夫婦、その長男の今日の船頭夫婦、その子どもの女の子二人、子どもといっても上が四歳、下は赤子だった。船頭をしてくれたこの長男には、妹や弟がいるらし

いが皆島を出て内地に（彼らはそう表現していた）いるそうである。この家族構成は、その後の何度かの釣行で知ったことである。

驚いたことにこの民宿には客室が無く、二つの寝室があるだけであつた。これは民宿ではなく「眠宿」である。その寝室の壁に一週間前の日付が入った魚拓が貼つてあつた。魚名アイナメ・大きき六十四センチと記されていた。（このアイナメの記録は、平成二十二年現在未だ誰も更新できないでいる）。民宿ならぬ眠宿の食卓は豪華であつた。ソイ、カレイ、あわび、蛸の刺身は絶品であつた。それに、口の中で甘みの広がる日本酒に合うホヤは、その後、私の釣行のお目当てとなつた。この日、不思議にネウはどんな形でも食卓には出なかつた。このことは、あとで小さな悲劇となることになる。